

黄金の郷

こしえるびと

つむぐストーリー vol.140

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

地域農業を未来へ残したい

東山町田河津

中村 健一 さん

父の背中を追いかけて

秋の乾いた風が吹き抜ける山間地。
中村健一さんは、一つ一つに目を光らせながらキュウリを収穫していく。
キュウリ農家に生まれた健一さんは旧東山町農協に就職し、畜産課で集乳車の運転手になった。酪農家から生乳を集める仕事の傍ら、空き時間で父・栄人さんのキュウリ栽培を手伝う生活を送っていた。栄人さんのキュウリはJAきゅうり部会で表彰を受けるなど評判だった。家族にとっても誇りで、2015年、栄人さんがこの世を去った際は「部会表彰のトロフィーを棺桶に入れて送り出した」という。その後もしばらくは集乳車の運転手が続けたが、「自分の力を試してみたい」とキュウリ栽培に専念する決意を固め、20年に退職。かつて栄人さんが歩いた道を歩み始めた。

その日の仕事はその日のうちに

栽培を始めて今年で7年目。妻の敦子さんと二人三脚でキュウリ栽培に励み、着実に実績を伸ばしている。1株から多くのキュウリを収穫したことで、JAきゅうり部会通常総会では2年連続で技能賞の表彰を受けた。

普段の作業で気を付けているのは、「その日のうちに行うべき作業は、その日のうちに終わらせる」こと。最近は猛暑や断続的な大雨など、天候がかなり不安定なため、作業の先延ばしは命取りになりかねない。健一さんは、芯の伸び具合や、葉の色付き方など、多くのことに注意してよく観察する。誘引や摘葉、病害虫防除など日々の作業を妥協せず行つ。「毎日しっかりと時間を掛けて向き合えば、それに応えるように立派なキュウリがたくさん育つ」と健一さんは話す。

次の世代のために

健一さんは今年の3月から市の農地利用最適化推進委員としての活動を始め、地域農業を守るために奔走している。特に並々ならぬ力を注いでいるのが後進の育成だ。きっかけは、地元東山町で新たにキュウリ栽培を始めた若者が現れたこと。それがとてもうれしく、足しげく指導に向向いては、長年かけて培ったキュウリ栽培のノウハウを惜しむことなく伝えている。「今後自分の持っているものを残さず伝えていくつもりでいる。ぜひこれから素晴らしいキュウリ生産者に成長してほしい」と待望の若手へ期待を寄せる。

健一さんは、栄人さんの背中から学び受け継いだものを、これからは次の世代へつないでいきたいと思っている。農業を守り発展させるために、健一さんはまだまだ道を進み続ける。



PROFILE

中村 健一さん (69)
Kenichi Nakamura
東山町田河津

1957年東山町田河津生まれ。集乳車の運転手としてJAに長年勤務。父・栄人さんの逝去をきっかけに2020年からキュウリ栽培に専念。キュウリ4畝、水稻30畝。妻、子の3人暮らし。

